

を格の漢語動作名詞と動詞からなる語結合
——『分類語彙表』の「2.30 心」に所属する語彙を中心に——

The Word-Combinations of Sino-Japanese Verbal Nouns with Case-marker “o” and Verbs:
Focusing on the “2.30 heart” of “BUNRUIGOIHYO”

王 丹彤
WANG, Dantong

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第47号 2019年3月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.47 2019

を格の漢語動作名詞と動詞からなる語結合
— 『分類語彙表』の「2.30 心」に所属する語彙を中心に—
The Word-Combinations of Sino-Japanese verbal nouns with Case-marker “o” and Verbs
—focusing on ‘2.30 heart’ of “BUNRUIGOIHYO”—

王 丹彤 (WANG,Dantong)

1. はじめに

「語結合」という術語について、『言語学大辞典 第6巻 術語編』では、ロシア語の統語論で用いられる概念 словосочетание の訳語として、以下のように説明している。

1950年代以降、ロシア語の統語論の記述で中核的概念として多用されるようになった術語で、2個以上の自立語が「一致(照応 согласование)」、「支配(управление)」または「付加(隣接 примыкание)」のいずれかの文法的従属関係によって結びつき、文のいろいろな成分を形成する統語論上の単位をこのようによぶ。(中略)

語結合はまた、自由語結合と非自由語結合に分類される。前者は читать книгу 「本を読む」のように、個々の構成要素が自立的な意味を保ち、相互に他の語と交換可能で派生力をもつものをさすが、железный 「鉄の」と дорога 「道」の結合である железная дорога 「鉄道」は、個々の構成要素の意味の合成とは、別の独立の事物をさす意味を獲得し、その意味はこの特殊な結合に限られている。

(『言語学大辞典 第6巻 術語編』 pp. 560-561)

ここで説明されている自由結合と非自由結合の関係を日本語について考えてみたい。例えば、「りんごをたべる」「山に行く」は自由結合であり、これを扱うのが連語論という文法論の分野である。一方、非自由結合の典型には、「手をだす」「道草をくう」のような慣用句であるが、慣用句だけが非自由結合なのではない。また、一口に慣用句と言っても、結合関係は単純ではない。奥田(1967)が指摘しているように、慣用的な語結合には二つのタイプがある。一つは形式的には二単語からなりたっているが、意味的には分割できない「慣用的ないいまわし」、もう一つは二単語の一つが自由な意味を保存し、もう一つが慣用句にしばられた意味を表す「慣用的なくみあわせ」である。上に挙げた「手をだす」「道草をくう」のような「慣用的ないいまわし」は典型的な慣用句として連語から容易に区別できるが、「努力をはらう」「うそをつく」のような「慣用的なくみあわせ」は必

ずしもそうではない。「慣用的なくみあわせ」は連語と慣用句の中間的な段階と認められる¹。

また、連語とも慣用句とも言えない、特殊な語結合が存在する。それはドイツ言語学の影響を受け、村木新次郎が指摘している「機能動詞結合」である。機能動詞結合とは、村木（1991）によれば、広い意味での動作性をもつ名詞と、実質の意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能²を果たす動詞との結合である。例えば、「勉強をする」「さそいをかける」「ダイエットをつづける」のような結合である。機能動詞結合は、構成要素のそれぞれが語彙の意味をもった自立的な単語のではなく、動詞の自立性が希薄で、むすびついている名詞への依存度が高いので、広い意味での慣用句の一種と考えられないわけではないが、典型的な慣用句とは異なり、ある程度の分割性、不固定性を持っているという点で、「慣用的なくみあわせ」に近いと言えよう。

本来、動詞が表す動作の語彙の意味を名詞（つまり動作名詞）がになうことで、名詞と動詞の役割分担が変わり、動詞が語彙的な意味をになわず文法的な機能をになうようになったのが機能動詞結合であるが、動作名詞が自由結合、すなわち連語の構成要素にならないわけではない。例えば、「計画を始める」は機能動詞結合であるが、「計画を考える」は連語である。ただし、この場合の「計画」はもはや「計画する」という動作を表してはいない。抽象名詞としての「計画」である。動作名詞と抽象名詞の両面をもつ単語では、こうした連語の構成が可能になる。

こうして、動作名詞と動詞からなる語結合には自由結合と非自由結合とがあることになる。本稿では、を格の動作名詞と動詞からなる語結合について調査し、両者の境界がどのあたりにあるのかを検討する。

2. 調査の方法

この節では、調査の対象となる語結合をどのように選定し、どのように自由結合と非自由結合の判別を行うかについて説明する。まず、語結合の選定にあたっては、『分類語彙表 増補改訂版』（以下『分類語彙表』と記す）から漢語動作名詞を抽出することから着手した。『分類語彙表』

¹ 高木（1974：9）ではこの点について次のように説明されている。「奥田靖雄「日本語文法・連語論」（教育国語・15）にくわしくのべられているのだが、慣用的なくみあわせは、一方で連語から発生して慣用的ないまわしや単語への移行・発展の過程の途中にあり、他方では、慣用的ないまわしから、その構成要素が自由ないみを獲得して多義語に発展し、連語に移行・解体する過程の媒介のやくわりをはたす位置にある。慣用的なくみあわせは連語と慣用的ないまわしとのあいだでの移行関係の過程に位置する中間的なタイプといえる。」この考え方は奥田の体系的言語観の表れであるだろう。

² 村木（1991）で注目されるのは、ヴォイス、アスペクト、ムードといった文法的意味を積極的に特徴づけている機能動詞結合である。例えば、「注目を浴びる」「誤解をあたえる」「迷惑をかける」のようなヴォイス的な意味を表すもの、「実施にうつす」「検討をおわる」「努力をかさねる」のようなアスペクト的な意味を表すもの、「協力をねがう」「納得がいく」「予定がある」のようなムード的な意味を表すものがかなり詳しく記述されている。

では、漢語動作名詞は「用の類」に「～する」という形で掲載されている。筆者は『分類語彙表』中のすべての漢語動作名詞をデータベース化しているが、その半分以上(8744語中5624語)が「人間活動—精神および行為」の部門³に所属しているため、本稿ではこの部門の中でも語彙数が最も多い「2.30 心」の語彙を取り上げることにした。

次に、「2.30 心」に所属する個々の漢語動作名詞について『現代日本語書き言葉均衡コーパス(通常版)』(以下、BCCWJと記す)で用例を検索した。検索条件として、キーを「漢語動作名詞+を+動詞」に、検索対象を「出版・書籍」に設定した。検索結果から、「臨床経験」「基礎訓練」「受験勉強」などの複合語の例や、動作名詞とくみあわさる動詞が和語単純動詞以外のもの(漢語、外来語、複合動詞や後置詞⁴を除く)を除外した動作名詞1373語のうち、用例が100例以上ある語をピックアップすると、下記の50語になる(用例数の順に並べた)。

意味、意見、注意、準備、努力、経験、評価、研究、理解、指示、判断、設定、反応、計画、注目、調査、期待、勉強、意識、検討、迷惑、工夫、練習、結論、無理、検査、信頼、希望、刺激、訓練、決定、覚悟、規定、実験、確認、改善、要求、体験、微笑、選択、決意、誤解、計算、認識、苦勞、分析、緊張、解決、判決、支度

上記の動作名詞50語と動詞のくみあわせは1370組あり、動詞の異なり語彙数は344である。その344語のうち、使用頻度の高い順に50語を以下に挙げる(用例数の順に並べた)。以下の調査は、この50語からなる535組の語結合を対象として行う。

する、おこなう、もつ、うける、かける、はらう、きく(聞く)、あたえる、える、だす、すすめる(進める)、しめす、ふかめる、くださ、のべる、あつめる、もとめる、はじめる、つづける、たてる、かさねる、みる、いう、きめる、つむ、うしなう、はかる、かんがえる、うながす、うかべる、むける、くわえる、あびる、しる、あらわす、おこたる、ひく、よせる、いだく、おく、こらす、ふくむ、こえる、かえる(変える)、なす、ととのえる、こめる、せまる、もうける、へる

以下、個々の語結合が自由結合か非自由結合かを判別するにあたっては、二編の論文として公開

³ 『分類語彙表』の分類の仕方はまず大分類として、「体の類」(名詞の仲間)「用の類」(動詞の仲間)「相の類」(形容詞の仲間)及びその他の仲間という4類に分ける。

各類はさらに、①抽象的關係(人間や自然のあり方のわく組み)、②人間活動の主体、③人間活動—精神および行為、④人間活動の生産物—結果および用具、⑤自然—自然物および自然現象、という5つの部門に細分されている。ただし、5部門が全部あるのは「体の類」、「用の類」と「相の類」が①③⑤の3部門のみある。

⁴ 例えば、「努力を通じて」「決定をめぐって」のような例がある。

されている、奥田靖雄による、を格名詞と動詞からなる連語の記述を参照する⁵。これらの論文を収録している言語学研究会編（1983）の巻末には、動詞索引が付されているので、これを利用して、対象となる動詞50語を構成要素とする語結合が記述されている箇所を参照することにする。

対象として選定した535組の語結合のうち、言語学研究会編（1983）に記述があるものは、「苦勞をかける」「努力をはらう」「評価をください」「判断をください」「結論をだす」「意見をのべる」の6組にすぎないが、50語の動詞のうち、47語については、どこかに記述がある。以下、この47語の動詞を構成要素とする語結合が言語学研究会編（1983）に収録された二つの奥田論文でどのように記述されているかについて、以下の観点から見ていく。

- ①当該動詞に関わる記述があるかないか？
- ②記述がある場合、動作名詞とのくみあわせは記述されているか？
- ③動作名詞と該当動詞の結合について連語（自由結合）として捉えられているか？

3. 考察

3.1 調査結果の概要

調査結果の概要は、図1のようである。

⁵ これには二種あって、一つは「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」（奥田1960）であり、もう一つは「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」（奥田1968-72）である。

両者の関係について、奥田は「…教育国語版は、ひきだした結論を整理して記述しているが、60年草稿は、その結論をひきだしていく過程をたんねんに記述している。（中略）60年草稿のほうは、わからないなりでも、を格の名詞と動詞とのくみあわせの全体をとらえようとしているが、教育国語版のほうは、はっきりした結論をだせないところを保留のままにのこしている。60年草稿における第三章第五節「動作的な態度のむすびつき」は、教育国語版でははずされている。そのかわり、教育国語版のほうには、第四章「状況的なむすびつき」があらたにつけくわえられていて、これらの論文は相互におぎないあっているとみなしてもいいだろう。」（言語学研究会編1983：16）と紹介している。

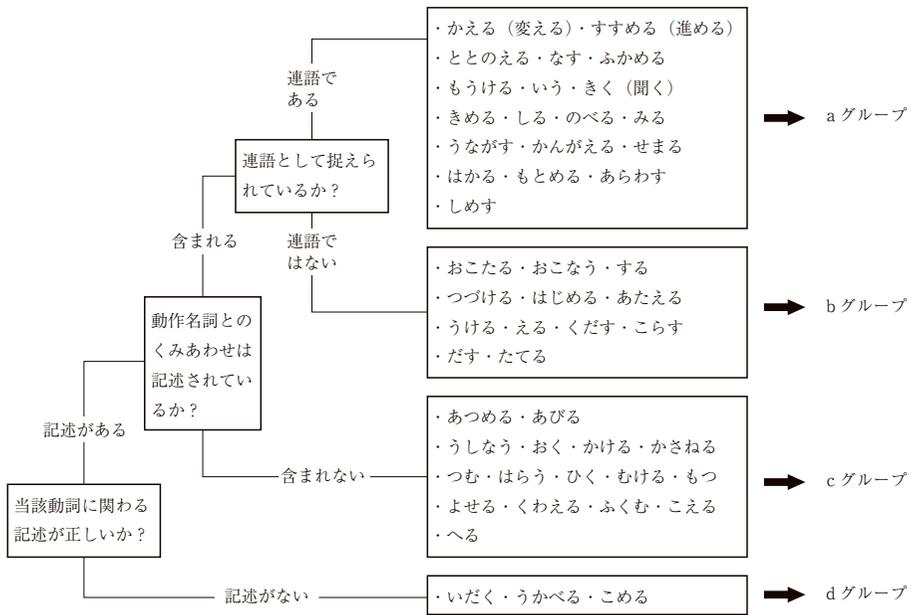


図1 調査結果

図1に示したように、研究対象にあたる動詞は大きく、連語と捉えられる (a)、非連語と捉えられる (b)、具体名詞との結合のみが記述され、動作名詞に関する記述がない (c)、記述自体がない (d) の4つのグループに分けられる。各グループの動詞の分布は表1ようになる。以下、グループごとに考察を加える。

表1 各グループにおける動詞の分布

グループ	動詞
a連語として記述されている	19 (38.0%)
b連語ではないとされている	12 (24.0%)
c動作名詞に関する記述がない	16 (32.0%)
d記述がない	3 (6.0%)
計	50 (100.0%)

3.2 連語として記述されている語結合

動作名詞と動詞からなる語結合のうち、言語学研究会編 (1983) で通常の連語として記述されているものには、「計画をかえる*」「研究をすすめる*」「準備をととのえる*」「連鎖をなす」「理解をふかめる*」「規定をもうける*」「意見をいう*」「鼓動をきく」「覚悟をきめる*」「起伏をしる」「あいさつをのべる」「変化をみる」「謝罪をうながす」「生活をかんがえる」「選択をせまる*」「自殺を

はかる」「面会をもとめる」「要求をあらわす*」「作文をしめす」がある⁶。

を格名詞と動詞からなる連語の中に現れる名詞には、具体名詞と抽象名詞がある⁷。例えば、「事にたいするはたらきかけ」を表す連語は、かざり名詞が具体的な物や人の一側面であるうごき、状態、特徴、あるいは関係を表し、かざられ動詞がその側面にはたらきかけ、変化や出現を意味する。漢語動作名詞はうごき、状態、特徴、関係を意味する名詞であるので、このタイプの連語を構成できる。以下に筆者の収集した用例の一部を挙げる⁸。

- 1 人はその理念に対して認識を深め、他人と共有し、判断することができます。(一行力)
- 2 介護療養病棟に入院が出来るように準備を整えた。(老いてこそ、始める)
- 3 自分が使いやすいようにパソコンの設定を変えてみましょう。(パソコン(楽)入門)
- 4 「日本銀行の行う業務内容の明確化の観点から、考査に関する規定を設けることが適当」とされた。(日本銀行の法的性格)
- 5 こうしたことを解明するため、WHOは各国の協力を得ながら調査を進めてきている。
(市民がつくるくらし・自治・未来)
- 6 その判断をなすにあたって誤る場合がありうるということ、これは法上あたりまえのことである。(広中俊雄著作集)

また、「心理的なかわり」も、構成に動作名詞があらわれうる連語のタイプである。「心理的なかわり」を表す連語は、かざり名詞が心理活動の対象を表し、かざられ動詞が心理活動を表す。

- 7 たんに子供たちからその一年の計画を聞くだけでなく、親は親として、ひとりの社会人として自分の仕事の中で、あるいは家庭の主婦、母親として…(いま魂の教育)
- 8 みるみるうちに人々が集まってきて自分の意見を述べる。(囚われのイラク)
- 9 したがって、もとの単語の意味を知っていれば、長い単語の意味も大体のところは推測でき

⁶ 奥田の記述では、かざられ動詞のみをリストにし、かざり名詞についてはカテゴリカルな意味を指摘するにとどめている場合がある。その場合は、筆者がBCCWJから収集した語結合の例で補った。*を付したものがそれである。

⁷ ただし、各名詞類について、奥田が明らかに定義をされていなかった。具体的な記述に言及しているだけである。ここでは大雑把に各タイプの語例を以下のように提示しておく、中には多義語も含まれている。

- ・具体名詞(物名詞、人名詞…)：「皿、枝、紙、いも、荷物、新聞、油、石、魚、あいつ、わたし、母、田中、一人、政治家…」
- ・現象名詞：「雨、ひかり、景色、身ぶり、表情、ようす、動作、態度、さわぎ…」
- ・抽象名詞(事名詞、動作性的名詞…)：「態度、興奮、団結、秩序、傾向、幸福、身分、家庭生活、形勢、案内、復活、仲裁、密航、回復、謝罪…」
- ・状況名詞：「道、川、山、トンネル、夏…」

⁸ 以下に挙げる番号のついた用例は、すべて筆者がBCCWJから収集したものである。

ます。(ソシユールと言語学)

- 10 自分の見た雲についての発表会での感想や意見を言う。

(板書で見る全単元の授業のすべて)

- 11 先に述べたように、手順を示す課題や知識と、概念や意味を表す課題や知識がある。

(授業の基礎としてのインストラクショナルデザイン)

- 12 彼は、住民の心配に理解を示し、この事業が環境を破壊することを認めてしまったとする。

(公共事業をどう変えるか)

- 13 初めに売上げ・利益の結論を決め、それに実績を合わせる決算が、…

(社長の不安をズバリ解消する民事再生の実務)

特に、「心理的なかわり」の下位タイプである「モーダルな態度」を表す連語は、原則として動作性の名詞がかざりの位置にたつ、特殊な連語である⁹。

- 14 A国政府は外交ルートを通じてB国に改善を求める、というものだった。

(ネット・ポリティックス)

- 15 いかよの事に相成るやも計り知れず、放火もありますよーと最高責任者の決断を促している。(朝敵伊予松山藩始末)

- 16 秋田さんは町長に決断をせまった。(命を救え！愛と友情のドラマ)

- 17 このような状況においては、高齢者の居住環境の改善を図っていく必要があります。

(Q&高齢者居住法)

なお、ここに挙げられた動詞が多義語として異なるむすびつき方で名詞と結合する場合がある。例えば、「みる」は、具体名詞や現象名詞と組み合わせると「感性的なむすびつき」(例18)、抽象名詞と組み合わせると「知的なむすびつき」(例19)になる。「かんがえる」という動詞は思考の質を表現する名詞と組み合わせると「思考の内容規定」(例20)、思考の素材を表現する名詞と組み合わせると「知的なむすびつき」(例21)、また、動作性を持つ名詞と組み合わせると「モーダルな態

⁹ 「モーダルな態度」を表す連語について、言語学研究会編(1983: pp130~131)には「このような事実は、心理活動をしめす動詞のなかには、モーダルな態度をしめすものがあって、それが動作性の名詞とくみあわさるときに、きわめて特殊な、モーダルな態度のむすびつきのできることをものがたっている。ここでも、構造的なタイプができあがっていて、それはかざられ動詞の語彙的な意味を自分にふさわしいものに修正してしまう。(中略)しかも、モーダルな態度のむすびつきは対象的な性格をうしないかけている。すくなくとも、知的なむすびつきや通達のむすびつきとおなじ程度に対象的であるとはいえない。つまり、ここでは、を格の名詞でしめされるものは、認識や伝達の対象というよりも、むしろ質料的な内容なのである。」と指摘されている。

度」(例22)になる¹⁰。

- 18 イヌにイソギンチャク毒素を最初に注射した場合には何も起こりませんでした。2度、3度と繰り返し注射をして反応を見ました。(アレルギー読本)
- 19 たとえば今回の分析をみると、総合繊維にくらべ、総合・化学繊維と地方産業は違いがみられないが、…(生涯現役時代の雇用政策)
- 20 このように、平成十一年の変化では「生涯学習部」という部の名称の意味を考えるが必要があると思いますが、…(新修豊中市史)
- 21 そろそろご夫婦の定年後の準備を考えるほうがより重要ではないでしょうか。
(アパート大家さんになった12人のフツウの人々)
- 22 危険因子となる高脂血症、高血圧、肥満などの改善を考えることが必要です。
(疾患理解とケアプランのための看護過程セミナー)

以上に取り上げた語結合は、いずれも言語学研究会編(1983)で連語すなわち自由結合として扱われているものであるが、この中には、動作性の意味をもちつつ動詞と結合しているものとそうでないものがあり、一律には扱えない。例えば、「意味を考える」の「意味」には動作性がない。「意味する」という動詞があるとしても、この連語の中にある「意味」は抽象名詞であって動作名詞ではないのである。「設定を変える」の「設定」は動作ではなく状態であろう。一方、「準備を考える」は、「準備することを検討する」という意味であり、動作性を残している。「改善を求める」のようなモーダルな態度のむすびつきになると、名詞に動作性があることが連語成立の条件となる。連語の中で名詞が動作性をたもっているとき、本来動詞が表すべき動作の意味が名詞に移り、残る動詞が具体的な動作を表さなくなり、文法的な機能をなうようになるということがおこってくる。その代表がモーダルな態度のむすびつきである。「あなたに改善を求めます」という文の意味は、「改善しなさい」という命令文にはほぼ等しい。また、「準備を整える」の意味は、実質的には「準備する」とほぼ等しいと言えよう。具体名詞とくみあわさるときの「整える」とは、連語の中での役割が違っている。

以上のように、連語として記述されているこのグループにも、単純に連語と見なせないものが含まれていることが分かる。実際、村木(1991)では、ここで取り上げたもののうち、「事にたいするはたらきかけ」を表す「認識をふかめる」「準備をととのえる」や、「モーダルな態度」を表す「改善をもとめる」「決断をうながす」を機能動詞結合として扱っているのである。

¹⁰ 思考の素材と思考の内容について、言語学研究会編(1983:135)では、「生活を考えるにおける「生活を」は思考活動の素材的な対象であるが、理由を考えるにおける「理由を」はその内容的な質を特徴づけている。」と述べている。

3.3 連語ではないとされている語結合

ここでは、言語学研究会編 (1983) で記述はされているものの、内容的には連語としては扱われていないものを取り上げる。それは「看護をおこたる」「行事をおこなう」「解釈をする」「訓練をつづける*」「調査をはじめめる*」「変化をあたえる」「指導をうける」「報知をえる」「評価をください」「よそおいをこらす」「結論をだす」「計画をたてる」のような語結合である。言語学研究会編 (1983) では、例23、例24のように、「たてる」や「ください」などの動詞が動作や状態を表す名詞と組み合わせると、「慣用的なくみあわせ」になると記述されている¹¹。

23 過去三年間の試験問題の傾向などを調べ、それに応じた勉強の計画をたてます。

(中学生の自宅学習法)

24 あらゆる事件の内情を知っていて、最終的な判断を下すのが好きなのだ。

(ダブリンの市民)

25 われわれ地球人の運命に注意をこらして考えるようにさせます。

(ハイパーテロルとグローバリゼーション)

26 いつまでに結論を出すのか、検討のタイムスケジュールを明らかにしてもらうことが必要だ。

(市民がつくるくらし・自治・未来)

すでに述べたように、「慣用的なくみあわせ」とは、構成要素の一つが自由な意味を保存し、もう一つが慣用句にしばられた意味を表す語結合である。ここに挙げられた「計画をたてる」「判断をください」の「計画」「判断」は自由な意味¹²を保存していると認められるが、「たてる」「ください」の語彙的な意味はこれらの名詞と結合するときのみ実現する。そして、これらの動詞と結合できる動作名詞の範囲はかなり限られている。「計画をたてる」「目標をたてる」とはいえ、準備をたてるとはいえないし、「判断をください」「評価をください」とはいえ、考察をくださいとはいえない。

また、「所有」や「動作の内容」を表す連語についても、同じようなケースが見られる。まず、「所有」については、言語学研究会編 (1983) に次のような説明がある。

¹¹ 言語学研究会編 (1983 : pp74~75) ではこの種のくみあわせについて次のように説明されている。「しかし、慣用的なくみあわせにおけるかざられ動詞の語彙的な意味は、慣用的なくみあわせにしばられていて、自由な意味ではない。単語の自由な意味は直接的に現実とかかわっているが、慣用的なくみあわせにしばられた意味は、慣用的なくみあわせの名づける的な意味を媒介にして、存在している。(中略) この種の慣用的なくみあわせのなかでは、具体的な作用動詞は特定の抽象名詞とくみあわせることで、語彙的な意味にずれ=抽象化をおこしているのである。」

¹² 「自由な意味」とは単語の語彙的な意味のなかには、現実の世界の物や現象や過程や質など、ひとときの現実と直接にかかわって、それを名づけているものである (奥田1967)。

しかし、ふるくさい所有動詞「あたえる」、「うける」が、抽象名詞とくみあわさるばあいは特殊である。これらの動詞が、状態（とくに内部の状態、したがって心理的な）をしめす抽象名詞とくみあわさると、状態生産のむすびつきをいいあらわす、フレジオロジカルなくみあわせをつくる。（中略）

そして、これらの動詞は、動作性の抽象名詞とくみあわさると、能動あるいは受動のたちばをしめすという陳述的な機能がつよまり、名詞を動詞化する助動詞「する」にちかづいてくる（動作性の抽象名詞が自動詞と関係しておれば、「あたえる」は使役的な性格をおびてくる）。

（言語学研究会編1983：219）

「所有」を表す連語は、本来、所有の対象とその対象に対する所有、あるいは所有権の移動を表現している。奥田の指摘によれば、状態名詞と所有動詞との結合は、「状態生産」に近いもの、または、動作名詞と所有動詞との結合は「助動詞」に近いものになる¹³。つまり、状態や動詞を表す動作名詞は所有物とは捉えにくく、所有動詞と結合すると、もはや連語ではなくなる。そのとき所有動詞の意味は抽象化し、語結合の土台ではなくなり、能動・受動というヴォイス的な意味を表すようになると考えられる。

27 我らの先達は、多くの誤解を受けました。（風林火山を誘え）

28 ようやく彼は正当な評価を得ることになった。（セロニアス・モンク生涯と作品）

29 筋肉に適度な刺激を与えることで、血行を促進し、筋肉をバランスよく鍛えることができずから、…（女40代からの「からだ」の最新医学）

このように動詞がヴォイス的な意味をになうようになる語結合については、村木（1991）が機能動詞結合の一種として取り上げている。村木（1991）では、「注目をあびる」「動揺をさそう」など、奥田が挙げた所有動詞によるもの以外も、幅広く機能動詞結合として扱われている。

続いて、「動作の内容」について取り上げる。これについて、言語学研究会編（1983）では、以下のように指摘されている。

はじめる、おわる、つづけるのような動詞は、動作の継続性をしめして、動作＝状態を

¹³ 奥田はそれぞれに例文を挙げられている。語結合の部分を取り出せば、「状態生産」に近いものには、「かなしみをあたえる」「納得をあたえる」「変化をあたえる」「打撃をあたえる」「ショックをあたえる」「感じをうける」「ショックをうける」「印象をうける」「衝動をうける」「打撃をうける」助動詞に近いものには、「警告をあたえる」「確答をあたえる」「刺激をあたえる」「束縛をあたえる」「訓戒をあたえる」「指導をうける」「祝福をうける」「おしえをうける」「保護をうける」「拷問をうける」「譴責をうける」がある。

しめす名詞とくみあわさって、それを動詞化するというはたらきをもっている。さらに、する動詞になれば、を格の名詞をともなうばあい、その名詞を動詞にするはたらき以外はもたないということになる。この観点からみれば、はじめる、おわる、つづける、するは、文法的にはたらいていて、名づける的な意味をうしなっているといえる。したがって、単語のくみあわせの領域では、あつかう必要がないともいえる。

(言語学研究会編1983：276)

「動作の内容」を表す語結合では、名詞が動作や状態を表現し、動詞がその動作や状態を様態、継続の側面から特徴づけるとされており、連語より合成述語に近いと考えられる。奥田は、1960年の論文では、これを記述の対象としていたが、教育国語版では外している。実際、1960年版の再録である上記の引用箇所の説明も、村木（1991）における機能動詞結合の説明とかなり重なっている。教育国語版では、奥田はこのタイプの語結合は連語ではないと判断したと推測できる。

30 [文字数と行数] タブで [フォントの設定] をクリックして、詳細な設定をします。

(ワード2000使えるワザ124)

31 そして、文学部の心理学科を目指して大学受験のための勉強を始めた。

(メランコリーチェア)

32 申請を受け付けた市町村は、申請した被保険者の心身の状況に関する調査を行う。

(介護福祉士養成講座)

33 その努力を怠ると、反対に私たちの方がその感情に支配され、流されてしまうのだ。

(原則中心リーダーシップ)

34 私は、大学の農獣医学部で、獣医になるための勉強を続けています。

(素人投稿禁断の告白セレクション)

3.4 動作名詞との結合に関する記述がないもの

言語学研究会編（1983）の動詞索引に掲載されているものの、当該箇所に動作名詞との結合に関する記述が見当たらないものがいくつかある。それらの動詞は、「あつめる」「あびる」「うしなう」「おく」「かける」「かさねる」「つむ」「はらう」「ひく」「むける」「もつ」「よせる」「くわえる」「ふくむ」「こえる」「へる」である。つまり、これらについては、言語学研究会編（1983）では、具体名詞との結合のみが取り上げられていることになる。だが、実際には、動作名詞と結合した用例が認められる。

35 そんな具合に練習を重ねて、感動的な演奏をやったのける。(こどもはおもしろい)

36 無理を通そうとする客にどう対応するか心得ているほどの経験を積んだ三十代の女性のようにだった。(破滅への舞踏)

「かさねる」「つむ」という動詞は、物名詞とくみあわさって「物にたいするはたらきかけ」を表現すると記述されているのだが、「練習」や「経験」のような動作名詞ともくみあわさり、その場合は「事にたいするはたらきかけ」をあらわすと考えられる¹⁴。「事にたいするはたらきかけ」は、うごき、状態、特徴、関係を表す名詞と抽象的な作用動詞から構成される連語である。

奥田は、動作名詞と「かさねる」「つむ」などの結合は記述していないが、「信頼をおとす」「誤解をとく」などの語結合について以下のように述べている。

この種の単語のくみあわせが、現行の連語の法則にしたがってできあがっていないとすれば、その成立はどのようなものだろうか？ この問題へのこたえとしては、単語のひゆ＝形象的な、あるいは換喩＝形象的な使用の固定化とみなすのが、いちばん妥当である。単語の形象的な使用においては、抽象的な概念を具体的なすがたのなかにえがきだすために、ものごとを具体的にさししめず単語をひゆ的に、あるいは換喩的に利用する。

(言語学研究会編1983: 73)

筆者の収集した用例の中には、「物にたいするはたらきかけ」を表す動詞の形象的な使用が多数見られた。

37 誰かに依頼をするときは、日頃から自分に信頼を置いてくれる人を選ぶことです。

(自分でらくらく会社をつくる本)

38 解決への大きな期待をかけるとともに、ある意味でその面からの対応で可能ともみていた。

(21世紀高齢社会とボランティア活動)

39 女性の新しい仕事として、注目を浴びましたし、確かにわが色彩活用研究所サミュエルのスタッフも多くが女性です。(トゥルー・カラー)

40 子どもたちの注意を引くのに、もっとも効果的ではない方法といえるのです。

(「マルチ能力」が育む子どもの生きる力)

¹⁴ 奥田の記述には、「物にたいするはたらきかけ」をさらに「もようがえ」「とりつけ」「とりはずし」「うつしかえ」「ふれあい」「結果的」(60年版には「つくりだし」という6つのタイプに分けられる。ここに挙げられた「かさねる」「つむ」は「とりつけ」動詞と認められている。語結合「練習をかさねる」と「経験を つむ」はすでに「とりつけ」のむすびつきではないと判断する根拠は、「とりつけ」のむすびつきが格名詞で示される物以外に、に格あるいはへ格の名詞で示される第二の対象が必要であるということである。

- 41 どうすれば正義をより実現できるのかという疑問へあなたの意識を向けるべきでしょう。
(日本における正義：国内外における諸問題)
- 42 今後の精神神経免疫学の臨床研究に期待を寄せている。(現代心療内科学)
- 43 新しい意見が出たり問題が生じた時に検討を加え、常に新しい情報を加えていきます。
(QC七つ道具100問100答)
- 44 「破壊活動防止法」は、内乱の罪のさらに周辺行為を広く処罰する規定を含んでいる。
(概説刑法)

なお、ここでの対象ではないが、前に取り上げた「所有」を表す連語、「状況的なむすびつき」を表す連語にも、「形象的な使用」と考えられる場合がある。

- 45 何もかも準備した状態では、そのような経験を持つことはけっしてないだろう。
(インナービュース)
- 46 少なくともその「豪華な再上映」は、注目を集め、昔の映画の復活に観客の関心をひきつけることになったからだ。(映画の音楽)
- 47 しかし外国の干渉なくして、事態が好転するとの希望を失ってはいない。
(シベリア出兵の史的研究)
- 48 量販店間の競争を「煽る」情報機器企業の存在にも注意を払いたい。
(フードシステムの構造変化と農漁業)
- 49 その心理は複雑であり常人の想像を超えています。(象と耳鳴り)
- 50 詳細な研究を経て専門家が首脳にその実効性についての報告を提出している。
(日中関係をどう構築するか)

例45～48は「抽象名詞+所有動詞」の結合であり、例49、50は、「抽象名詞+移動動詞」の結合である。これも、単語の形象的な使用の固定化と考えられるであろう。

こうした単語の形象的な使用によっても、動詞の意味が抽象化し、意味の中心をになう動作名詞に対して補助的な役割をになうようになる現象が生じている。「練習をかさねる」「経験をつむ」は「練習」「経験」の反復的な実現を表し、「経験をもつ」は「経験する」、「注目を集める」は「注目される」に言い換えられる。また、「想像を越える」は「想像できない」という不可能の意味を表しているとも言える。これらは連語、慣用句、機能動詞結合にまたがっており、今後、精密な記述が必要である。

4. おわりに

以上、本稿では、『分類語彙表』の「2.30 心」の部門に収録されている漢語動作名詞を構成要素とする語結合が、日本語の連語論の研究の代表である言語学研究会編（1983）においてどのように記述されているかの調査を行い、その結果について考察した。その結果、連語ではないという意識にもとづいて記述されている部分についてはもちろんのこと、連語として記述されている部分についても、特殊な事例が少なからず存在することが確認できた。

結局、連語（自由結合）と非連語（非自由結合）を明確に区分することは難しく、今後、典型的な連語とは言えないものについて、それらがどのような点で連語らしくないのかということ、多角的に詳細に分析していくことが必要である。具体的な課題としては、連語、慣用句、機能動詞結合、形式動詞結合、複合述語などの関係を明らかにすることが求められる。それによって、連語とは何かということもより明確になることと思われる。そのためには、実際の語結合のあり方を徹底的に調査するしかない。本稿はそれに向けての予備的な考察である。

参考文献

- 奥田靖雄（1960）「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」（言語学研究会編（1983）に収録）
- 奥田靖雄（1967）「語彙的な意味のあり方」（『教育国語』8号、同1985『ことばの研究・序説』むぎ書房に収録）
- 奥田靖雄（1968-1972）「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』12-28（言語学研究会編（1983）に収録）
- 言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房
- 国立国語研究所編（2004）『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書
- 鈴木康之（1983）「連語とはなにか」『教育国語』73
- 高木一彦（1974）「慣用句研究のために」『教育国語』38
- 村木新次郎（1985）「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』4-1
- 村木新次郎（1991）『日本語動詞の諸相』ひつじ書房